

【第4章 調査結果とりまとめ】

I. 豊島区ヤングケアラー実態把握調査の特徴

本調査は、豊島区の「ヤングケアラー」と思われる子どもをより正確に把握するため、小学生・中学生・高校生年齢に対して幅広く実態調査を実施するだけでなく、学校や子どもが関わる関係機関においても「ヤングケアラー」と思われる子どもへの対応状況などの調査を同時におこなった。

結果として対象となる子どもと関係機関の大人から多数の回答を得ることで、区の状況把握や現状の「ヤングケアラー」に対する認知度、課題・難しさなどの傾向も捉えることができた。

また小学生へのアンケートにおいては、ヤングケアラーのイラストの注釈に平易表現を加えることで、小学生にもヤングケアラーに自身があてはまるか問うことにより、お世話とヤングケアラーの概念の差異を認識させることで、その回答結果から、まだ幼い子どもたち（小学4年生～6年生の児童）からも有意のある結果を引き出すことができた。

今回は無記名式でアンケートを実施。今後はより具体的な支援のために、記名式のアンケートをとることも視野にいれる必要があると思われる。

II. 調査結果とりまとめ(分析・考察)

(1) 子ども向けアンケート調査

- ① お世話をしている家族が「いる」と回答した小学生は21.4%（4人に1人）、中学生は4.7%（21人に1人）、高校生年齢は2.8%（35人に1人）

お世話をしている家族が「いる」と回答した、豊島区の小学生の調査結果は、国の小学生の調査結果（6.5%・15人に1人）に比べて高い傾向がみられ、中学生と高校生年齢の調査結果は、国の中学生の調査結果（5.7%・17人に1人）と高校生年齢の調査結果（4.1%・24人に1人）に比べて低い傾向がみられた。

国の調査報告では、子どもが「お世話をしている」という回答には、「お手伝いの範囲としてのお世話をしている」と「ヤングケアラーとしてのお世話をしている」が混在している可能性が指摘されており、本区の小学生の回答においては、特にそれが顕著にあらわれた可能性があり、次項②にてその理由を説明する。

■ 図表 第4章-II-(1)-① お世話をしている家族が「いる」と回答した人数と割合の比較

	豊島区		国	
	何人に1人がお世話をしているか	割合	何人に1人がお世話をしているか	割合
小学生	4人	21.4%	15人	6.5%
中学生	21人	4.7%	17人	5.7%
高校生年齢	35人	2.8%	24人	4.1%

※補足：豊島区は小学生が4年生～6年生、中学生が1年生～3年生、高校生年齢が高校1年生～3年生の年齢の方を対象、国は小学6年生、中学2年生、高校2年生を対象としている。

② 「お世話している」＝「ヤングケアラー」ではない可能性について

本調査においては、国と同様の方法で、まず「家族のお世話」の有無、またその状況について質問している。そのうえで、小学生・中学生・高校生年齢に対して「ヤングケアラーの状態像」をイラストにて示し、回答者自身がヤングケアラーに該当すると思うかを質問している。

小学生については、区独自に「ヤングケアラーの状態像」のイラストに注釈で平易表現を加えることで、小学生にもヤングケアラーに自分があてはまるかを問うことにより、「お世話をしている」と「自分はヤングケアラーにあてはまる」の回答結果の比較が可能となった為、まだ幼い子どもたち（小学4年生～6年生の児童）からも有意のある結果を引き出すことが出来た。

「お世話をしている」と回答した割合が小学生 21.4%、中学生 4.7%、高校生年齢 2.8%となった結果に比べて、「自分はヤングケアラーにあてはまる」と回答した割合は小学生 2.2%、中学生 1.5%、高校生年齢 2.3%となり、全世代において割合が低くなっている。

これは「お世話をしている」と回答した子どもの中には、ヤングケアラーとして定義される「お世話を要する家族がいる」、或いは「大人が担うようなお世話の責任を引き受けている」とまでは言えない、子どもが行う範囲内の「お手伝い」として家事や家族のお世話を行っている子どもが一定数含まれていると推察される。

この点においては「お世話をしている」かつ「自分はヤングケアラーにあてはまる」と回答した割合についての結果が、国の中学2年生 16.3%、全日制高校2年生 15.0%、定時制高校2年生相当 25.8%と比較すると、本区は小学生 4.9%、中学生 9.1%、高校生年齢 43.8%と、高校生年齢以外では割合が低くなっている事からも、特に小学生や中学生では、「お手伝い」として家事や家族のお世話を行っている子どもが、「お世話をしている」と回答した子どもの中に一定数含まれている可能性がある（※国は本項目における小学生の調査項目がないために単純比較不可）。

しかし、今回の調査では、子ども（特に小学生）が「お手伝いの範囲としてのお世話をしている」と「ヤングケアラーとしてのお世話をしている」を混在しているかについては明確にできなかった為、今後の実態調査の際には、より深掘した調査が必要となる。

■ 図表 第4章－II－(1)－② 自分がヤングケアラーにあてはまるかの割合の比較

(単位：%)

	アンケートに回答した子ども		お世話をしていると回答した子ども	
	ヤングケアラーにあてはまる		ヤングケアラーにあてはまる	
	豊島区	国	豊島区	国
小学生	2.2		4.9	
中学生	1.5	1.8	9.1	16.3
高校生年齢	2.3	2.3	43.8	15.0

③ 「ヤングケアラー」の自己認識がある子どもの状況

「自分はヤングケアラーにあてはまる」と回答した場合、「あてはまらない」と回答した場合に比べ、小学生・中学生・高校生年齢の全ての世代で、遅刻や早退の状況については「たまにする・よくする」（小学生 20.0%・中学生 30.8%・高校生年齢 15.4%）の割合が高く、学校生活等については「提出しなければいけない書類などの提出が遅れることが多い」（小学生 28.9%・中学生 53.8%・高校生年齢 38.5%）、「持ち物の忘れ物が多い」（小学生 26.7%・中学生 46.2%・高校生年齢 38.5%）、「宿題や課題ができていないことが多い」（小学生 11.1%・中学生 30.8%・高校生年齢 30.8%）等が高くなっている。

また、「自分はヤングケアラーにあてはまる」と回答した場合、「あてはまらない」と回答した場合に比べ、小学生・中学生・高校生年齢の全ての世代で、お世話の頻度について「ほぼ毎日」（小学生 59.1%・中学生 75.0%・高校生年齢 85.7%）の割合が高く、お世話による制約については、小学生・中学生・高校生年齢の全ての世代で、「睡眠が十分に取れない」（小学生 18.2%・中学生 25.0%・高校生年齢 28.6%）が高くなっている。

「自分はヤングケアラーにあてはまる」と回答した場合、「あてはまらない」と回答した場合に比べ、現在の悩みや困りごとについては、小学生は「進路のこと」（17.8%）「友人との関係のこと」（13.3%）「学費（授業料）などを含む、家庭の経済的状況のこと」（6.7%）、「学業や成績のこと」（22.2%）、中学生は「部活動」（23.1%）、「学費（授業料）などを含む、家庭の経済的状況のこと」（15.4%）、高校生年齢は「学業や成績のこと」（53.8%）、「学費（授業料）などを含む、家庭の経済的状況のこと」（46.2%）、「友人との関係の事」（30.8%）等が高くなっている。

この結果から「自分がヤングケアラーにあてはまる」と回答する子どもは、「あてはまらない」と回答した場合に比べ、学校生活に何かしらの悩みを抱えて、支障がでている可能性がある。

また、「自分はヤングケアラーにあてはまる」と回答した場合でも、小学生・中学生・高校生年齢の全ての世代において、お世話に関する相談した経験は「ない」の割合が 60.0%以上を占める。しかし、小学生・中学生においては、「自分はヤングケアラーにあてはまる」と回答した場合、相談した経験が「ある」（小学生 31.8%・中学生 25.0%）の割合が、「あてはまらない」（小学生 14.5%・中学生 0.0%）と回答した場合に比べて高い。

「自分はヤングケアラーにあてはまる」と回答した場合、「あてはまらない」と回答した場合に比べ、相談相手として、小学生・中学生においては「家族（父、母、祖父、祖母、きょうだい）」（小学生 22.7%・中学生 25.0%）、「友人」（小学生 22.7%・中学生 25.0%）の割合が高くなっており、身近な人にしか相談ができていない状況がうかがえる。

④ 「ヤングケアラー」の概念について、「聞いたことがある」と回答した小学生は 56.6%、 中学生は 62.5%、高校生年齢は 74.2%

「ヤングケアラー」の概念を知っている割合は、国の調査結果では中学 2 年生 15.1%、全日制高校 2 年生 12.6%、定時制高校 2 年生相当 13.7%の調査結果と比べて非常に高く、「ヤングケアラー」の認知度は高まっているといえる。

一方、小学生で 42.3%、中高生で 37.1%、高校生年齢で 25.6%は「聞いたことはない」という回答があり、ヤングケアラーの自己認識がないまま、ヤングケアラーとして定義される「お世話をしている」可能性もあり、より正確なヤングケアラーの実態把握の為には、より広く「ヤングケアラー」の認知度を高めることが必要である。

⑤ お世話をしていることで学校生活等に影響がみられる

「お世話をしている」と回答した場合、「お世話をしていない」と回答した場合に比べ、中学生・高校生年齢においては健康状態が「よくない」（中学生 2.4%・高校生 6.3%）、「あまりよくない」（中学生 4.9%・高校生 6.3%）、小学生・中学生においては学校を「たまに欠席する」（小学生 21.1%・中学生 12.2%）、「よく欠席する」（小学生 2.2%・中学生 14.6%）、小学生・中学生・高校生年齢の全ての世代において、遅刻や早退を「たまにする」（小学生 17.5%・中学生 12.2%・高校生年齢 12.5%）と回答した割合が高く、家族のお世話をしていない場合に比べ、健康状態や学校生活にも影響が出ている可能性がある。

また、「お世話をしている」と回答した場合、「お世話をしていない」と回答した場合に比べて、小学生・中学生・高校生年齢の全ての世代において、学校生活において「持ち物の忘れ物が多い」（小学生 27.9%・中学生 36.6%・高校生年齢 25.0%）、「提出しなければいけない書類などの提出が遅れることが多い」（小学生 18.0%・中学生 26.8%・高校生年齢 25.0%）等の割合が高くなっており、こうした学校生活の状況は「家族のお世話をしている」可能性があり、その子どもが「ヤングケアラー」である可能性をふくめて、大人が注意深く見守りをする必要がある。

さらに「お世話をしている」と回答した場合、「お世話をしていない」と回答した場合に比べて、現在の悩みや困りごととして、小学生・中学生・高校生年齢の全ての世代において全体的に回答人数の割合が高い傾向にある。

その中でも、小学生・中学生・高校生年齢の全ての世代において「学費（授業料）などを含む、家庭の経済的状況のこと」（小学生 4.0%・中学生 17.1%・高校生年齢 43.8%）が高くなっており、小学生においては「両親やきょうだいの仲が良くないこと」（4.5%）、中学生においては「病気や障がいのある家族のこと」（7.3%）、高校生年齢においては「病気や障がいのある家族のこと」（37.5%）、「家族内の人間関係のこと※両親の仲が良くない」（25.0%）等が高くなっている。

これは「お世話をしている」と回答した子どもが、家庭の経済面や家族に関する悩みや困りごとを抱えていることがうかがえる。

⑥ 3時間以上のお世話は学校生活や日常生活に影響がでる可能性がある

平日1日あたりにお世話に費やす時間については、小学生平均 3.2 時間、中学生平均 3.1 時間、高校生年齢平均 3.3 時間であった。これは国の小学6年生平均 2.9 時間と比べて長く、中学2年生平均 4.0 時間、全日制高校2年生平均 3.8 時間と比べて短い。

■ 図表 第4章－Ⅱ－（1）－⑥ 平日1日あたりにお世話に費やす時間の比較

（単位：時間）

	豊島区	国
小学生	3.2	2.9
中学生	3.1	4.0
高校生年齢	3.3	3.8

お世話に費やす時間が1日3時間以上の場合には、お世話に費やす時間が3時間未満に比べて、小学生・中学生・高校生年齢の全ての世代において、学校を「たまに欠席する」（小学生24.1%・中学生25.0%・高校生年齢16.7%）、遅刻や早退を「たまにする」（小学生19.0%・中学生25.0%・高校生年齢16.7%）が高くなっている。

また、お世話に費やす時間が1日3時間以上の場合、お世話に費やす時間が3時間未満に比べて、お世話のきつきについて、小学生・中学生においては、「時間的余裕がない」（小学生3～7時間未満16.5%・小学生7時間以上22.0%・中学生3～7時間未満50.0%・中学生7時間以上100.0%）が高くなっており、高校生年齢ではお世話に費やす時間に関わらず（3時間未満75.0%・3～7時間未満33.3%）、学校生活や日常生活に影響が出て、余裕がなくなっていることがうかがえる。

また、平日1日あたりにお世話に費やす時間が3時間以上になると、お世話に費やす時間が3時間未満に比べて、学校生活で「持ち物の忘れ物が多い」（小学生3～7時間未満35.4%・中学生3～7時間未満50.0%・高校生年齢3～7時間未満33.3%）の割合が高く、その他にも「友人と遊んだり、おしゃべりしたりする時間が少ない」（小学生3～7時間未満6.3%・小学生7時間以上3.7%・中学生3～7時間未満12.5%・高校生年齢3～7時間未満33.3%）、「提出しなければいけない書類などの提出が遅れる」（小学生3～7時間未満26.6%・高校生年齢3～7時間未満33.3%）、「部活動や習い事を休むことが多い」（小学生3～7時間未満6.3%・小学生7時間以上7.4%・中学生3～7時間未満12.5%）、「学校では1人で過ごすことが多い」（小学生3～7時間未満6.3%・高校生年齢3～7時間未満16.7%）も高くなる。

つまり、お世話の長時間化により学校生活への影響や、友人や外部とのコミュニティ形成への影響もみられるようになると推察される。

⑦ 小学生がお世話を必要としている相手が「きょうだい」の際には「お手伝い」として認識している可能性が高いが注意も必要

お世話をしている家族は、小学生では「お母さん」（54.2%）が最も高く、中学生・高校生年齢では「きょうだい」（中学生39.0%・高校生年齢62.5%）が最も高くなっている。

小学生のお世話の相手が「きょうだい」の場合、「父母」や「祖父母」の場合に比べて、お世話を始めた時期として「就学前」（56.3%）、「小学生低学年」（21.9%）が高くなっている。

また、お世話の相手が「きょうだい」の場合、小学生・中学生・高校生年齢の全ての世代においてお世話の頻度が「ほぼ毎日」（小学生47.5%・中学生50.0%・高校生年齢60.0%）が高く、お世話をしている時間についても「3時間以上」（小学生3～7時間未満27.3%・小学生7時間以上10.9%・中学生7時間以上6.3%・高校生年齢3～7時間未満50.0%・高校生年齢7時間以上10.0%）が高い傾向にある。

つまりお世話の対象が「きょうだい」の場合には、幼いころからお世話を担っており、かつ時間的な負担が大きい状況がうかがえる。

しかし、小学生が「きょうだい」のお世話をしている場合、「父母」や「祖父母」の場合に比べて、お世話について相談したことがない理由は「誰かに相談するほどの悩みではないから」（50.3%）が最も高く、お世話をすることに感じているきつきについても「特にきつきは感じていない」（63.9%）が最も高い。お世話をすることに感じているきつきについて「特にきつきは感じていない」という回答については、中学生・高校生年齢が「きょうだい」のお世話をしている場合には、より割合が高くなっている（中学生81.3%・高校生年齢80.0%）。

これは「きょうだい」のお世話については、子どもが行う範囲内の「お手伝い」として認識している可能性が高いと推察される。

一方で小学生は「きょうだい」のお世話については、「父母」や「祖父母」のお世話の場合に比べ、「体力の面で大変」（14.8%）、「気持ちの面で大変」（15.3%）、「時間の余裕がない」（12.6%）も高くなっている為、小学生が無意識に「きょうだい」のお世話に負担を感じている可能性もあり、大人が注意深く見守りをする必要があると考えられる。

⑧ 性別によるお世話の状況の違い

女性は男性に比べて、小学生・中学生・高校生年齢の全ての世代において、お世話の開始時期について「小学生低学年」（小学生 49.0%・中学生 22.2%・高校生年齢 20.0%）の割合が男性に比べ高く、お世話の頻度も「ほぼ毎日」（小学生 34.1%・中学生 38.9%・高校生年齢 60.0%）の割合が高くなっている。

お世話に費やす時間についても、女性は男性に比べて、3時間以上のお世話をしている割合が高い（小学生 3～7時間未満 19.2%・小学生 7時間以上 7.7%・中学生 3～7時間未満 22.2%・中学生 7時間以上 5.6%・高校生年齢 3～7時間未満 80.0%）。

さらに、お世話の内容についても、全体的に回答人数の割合が高く、女性は男性に比べて、お世話をはじめた年齢が若く、お世話の負担が大きいことが推察される。

また、お世話についての相談相手は、女性は男性に比べて、小学生・中学生・高校生年齢の全ての世代において「家族（父、母、祖父、祖母、きょうだい）」（小学生 14.9%・中学生 11.1%・高校生年齢 20.0%）が高くなっており、女性の方が家族に相談をする傾向がうかがえる。

⑨ 小学生はお世話の内容が多岐にわたることで長時間化、中学生・高校生年齢は「きょうだい」のお世話により長時間化している可能性がある

お世話の内容について、小学生・中学生・高校生年齢の全ての世代において、お世話を必要としている家族が父母・祖父母の場合「家事（食事の準備や掃除、洗濯）」（小学生父母 44.9%・小学生祖父母 40.0%・中学生父母 42.1%・中学生祖父母 55.6%・高校生年齢父母 100.0%・高校生年齢祖父母 66.7%）が高く、お世話を必要としている家族がきょうだいの場合「きょうだいのお世話や保育所等への送迎など」（小学生 35.0%・中学生 56.3%・高校生年齢 70.0%）、「見守り」（小学生 36.1%・中学生 43.8%・高校生年齢 80.0%）が高くなっている。

これは世代を問わず、子どものお世話の内容が「家事（食事の準備や掃除、洗濯）」の場合には、お世話を必要としている家族が父母・祖父母の可能性、「きょうだいのお世話や保育所等への送迎など」「見守り」の場合には、お世話を必要としている家族がきょうだいの可能性が高く、これらのお世話の内容が子どもにみられる際には、家庭における子どものお世話の相手を推察できる。

また、小学生のお世話に費やす時間が7時間以上の場合、7時間未満の場合に比べて、全体的に回答人数の割合が高くなっており、特に「愚痴を聞く、話し相手になるなど」（25.9%）、「買い物や散歩と一緒に行く」（37.0%）、「きょうだいのお世話や送り迎え」（51.9%）、「通訳※日本語や手話など」（7.4%）、「見守り」（37.0%）等が高くなっている。これは、小学生はお世話の内容が多岐にわたることで、お世話に費やす時間が長時間化していると推察される。

中学生のお世話に費やす時間が3時間以上の場合、3時間未満の場合に比べて、「家事（食事の準備や掃除、洗濯）」（3～7時間未満 50.0%・7時間以上 100.0%）、「きょうだいのお世話や送り迎え」（3～7時間未満 37.5%・7時間以上 100.0%）、「見守り」（3～7時間未満 37.5%・7時間以上 100.0%）等が高く、高校生年齢のお世話に費やす時間が3時間以上の場合、3時間未満の場合に比べて、「きょうだいのお世

話や送り迎え」（3～7時間未満 66.7%・7時間以上 100.0%）、「見守り」（3～7時間未満 66.7%・7時間以上 100.0%）等が高い。これは、中学生・高校生年齢において「きょうだいのお世話や送り迎え」「見守り」の割合が高いことから、前述の通り、お世話の相手が「きょうだい」であることが推察でき、「きょうだい」のお世話に時間を長く費やしている可能性が高い。

⑩ お世話に関する相談状況

小学生・中学生・高校生年齢の全ての世代において、「お世話の相談をした経験がない」（小学生 65.8%・中学生 73.2%・高校生年齢 75.0%）が最も高くなっている。しかし、小学生における、お世話に費やす時間が1日3時間以上の場合には、3時間未満の場合に比べて、「お世話の相談の経験がある」（小学生 3～7時間未満 25.3%・小学生 7時間以上 25.9%）が高くなっている。

また小学生・中学生・高校生年齢の全ての世代において、お世話の頻度が「ほぼ毎日」（小学生・中学生・高校生年齢）と回答した場合、「お世話の相談の経験がある」（小学生 42.5%・中学生 66.7%・高校生年齢 66.7%）が高くなっている。

一方で、お世話について相談していない理由は小学生・中学生においては「誰かに相談するほどの悩みではない」（小学生 60.1%・中学生 50.0%）が最も高くなっており、高校生年齢においては「相談しても状況が変わるとは思わない」（58.3%）が最も高く、その他に「誰に相談するのがよいかわからない」（33.3%）、「誰かに相談するほどの悩みではない」（33.3%）も高くなっている。

これは「お世話をしている」と回答した子どものお世話の内容が、ヤングケアラーとして定義される「お世話（ケア）を要する家族がいる」、或いは「大人が担うようなお世話（ケア）の責任を引き受けている」といえるような内容か、それとも子どもが行う範囲内の「お手伝い」として家事や家族のお世話を行っている内容かを判断する為にも、子どもが大人に相談しやすい環境を整備する必要があるといえる。

⑪ 子どもと「ヤングケアラー」への理解と子どもに寄り添った支援の充実

アンケート調査の自由意見では、「このアンケート調査でヤングケアラーについて初めて知った」「ヤングケアラーについてよくわかった」という意見が多くあり、本調査が「ヤングケアラー」の認知度向上の普及啓発の一旦となったといえる。

一方で、「お世話をしている」と回答した子どもから「勝手に可哀想だとか思われたり変な目で見られたりしたくない」「SNSやマスコミなどでヤングケアラーの家族などを悪く報道しないで欲しい」など、「ヤングケアラー」へのイメージの取り扱いについても意見があった。

そして、ヤングケアラーに必要だと思う支援についても、「相談体制の充実、相談しやすい・話しやすい環境づくり」「子どもたちの意見を伝えられる環境づくり、意思の尊重・声かけ」などの子どもが自分の事を話しやすい環境面や、「学校におけるサポートや配慮」「周囲の大人の理解や寄り添い」などの大人が子どもに対する見守り、また「具体的な支援や金銭面でのサポート」についてなど、子どもの目線からも幅広く意見があり、これらの意見をいかして、周囲の大人が子どもにも権利があることを理解し、子どもに寄り添い、子どもの目線に立った具体的な支援を考えることが必要である。

(2) 関係機関向けアンケート調査

① 「ヤングケアラー」の概念について、「聞いたことがある」と回答した関係機関の回答者は96.4%

「ヤングケアラー」の概念を知っている関係機関施設としての回答者は98.4%、関係機関個人としての回答者は95.8%、全体合計としては96.4%であった。しかし、そのうち意識して対応している学校・施設は、関係機関施設としての回答者は40.5%、関係機関個人としての回答者は35.0%、全体合計36.3%にとどまっている。

② 自身の機関にヤングケアラーと思われる（可能性含めて）子どもが「いる」と回答した関係機関の回答者は24.0%

ヤングケアラーと思われる子どもが「いる」と回答した関係機関は、関係機関施設としての回答者は19.0%、関係機関個人としての回答者は25.6%、全体合計では24.0%であった。

さらに「ヤングケアラー」の概念の認識との関係を見ると、「ヤングケアラー」の概念を知っており意識して対応している回答者の方が、「言葉を知らない」「言葉は聞いたことがあるが、具体的には知らない」「言葉は知っているが、学校・施設としては特別な対応をしていない」の回答者に比べて、ヤングケアラーと思われる子どもが「いる」（施設の回答27.5%・個人の回答51.5%・全体の回答44.9%）という割合が高い。

また、ヤングケアラーと思われる子どもの状況については、関係機関施設、個人の回答者に関わらず「家族の代わりに、幼いきょうだいの世話をしている」（施設の回答37.5%・個人の回答61.2%・全体の回答56.6%）、「障がいや病気のある家族に代わり、家事（買い物、料理、洗濯、掃除など）をしている」（施設の回答25.0%・個人の回答39.8%・全体の回答36.9%）が高くなっている。

関係機関個人としての回答においては、「家族の通訳をしている（日本語や手話など）」（30.6%）、「目を離せない家族の見守りや声掛けをしている」（27.6%）、「アルコール・薬物・ギャンブルなどの問題のある家族に対応している」（26.5%）等も高くなっている。

この結果から、学校・施設ともに、お世話をしていると大人が気づきやすい状況の子ども（きょうだいのお世話、障がいや病気のある家族に代わる家事など）がヤングケアラーとして認識されている傾向がうかがえる。

さらに、関係機関個人としては、より子どもの家庭の事情に踏み込んだお世話の内容（通訳、見守り、依存症など）の状況も把握している傾向があり、関係機関個人の回答においては、関係機関施設の回答と比較すると、ヤングケアラーと思われる子どもの状況をより把握していると推察される。

ヤングケアラーの把握の難しさについては、関係機関施設、個人の回答者に関わらず、「家族内のことで問題が表に出にくく、実態の把握が難しい」（施設の回答83.9%・個人の回答73.4%・全体の回答75.3%）という回答が最も高く、次いで「ヤングケアラーである子ども自身やその家族がヤングケアラーという問題を意識していない」（施設の回答38.7%・個人の回答26.6%・28.7%）が高かった。

③ SSW は「要請に応じて派遣される」が 37.2%。SC は「週に 1 回程度派遣・配置されている」が 42.8%と学校関係者が回答

SSW の配置・派遣状況について、関係機関施設、個人の回答者に関わらず「要請に応じて派遣される」（施設の回答 35.4%・個人の回答 37.9%・全体の回答 37.2%）が最も高い。

SC の配置・派遣状況については、関係機関施設、個人の回答者に関わらず「週に 1 回程度派遣・配置されている」（施設の回答 36.6%・個人の回答 44.9%・全体の回答 42.8%）が最も高い。

④ 「ヤングケアラー」の発見と対応の難しさ

学校・施設では「ヤングケアラー」を把握するには「特定のツールなどではなく、できるだけ「ヤングケアラー」の視点を持って個別に検討・対応している」（施設の回答 88.9%・個人の回答 90.5%・全体の回答 90.1%）が高かった。

学校・施設で共有しているケースとして「精神的な不安定さ」（施設の回答 45.2%・個人の回答 51.7%・全体の回答 50.1%）、「学校や行事・イベントを休みがち」（施設の回答 33.3%・個人の回答 37.6%・全体の回答 36.5%）、「宿題や持ち物の忘れ物が多い、必要な書類などの提出遅れや提出忘れが多い」（施設の回答 32.5%・個人の回答 35.2%・全体の回答 34.6%）など、学校や日常生活に支障がでてきている子どもであれば、学校・施設で情報共有をすることで、注意深く見守りもでき、支援の検討もできる。

しかし、そうではない場合には、子ども自身から相談等がなければ「ヤングケアラー」の発見や子どもへの具体的な対応・支援は難しいケースがあり、「ヤングケアラー」と思われる子どもがいても、家族内のことで問題が表に出にくく、実態の把握が難しいと推察される。

また、保護者が関係機関の対応を拒否した為に、それ以上関われないという回答もあり、保護者の理解が得られない場合には支援につながらず、子どもの負担軽減につなげられない場合もある。

⑤ 支援体制やつなぎ先の不透明さや難しさ

「ヤングケアラー」と思われる子どもがいた場合、学校・施設だけでは対応が難しく、当該施設の職員の負担も多いので、外部につなぐことが求められるが、「ヤングケアラー」に対する基準やつなぎ先の支援体制が不透明な為に、どの機関にどのように相談すればよいかわからない、つないで良いかわからないといった意見や、本人や家族が支援を望まなければ、外部機関やつなぎ先に相談も出来ないという意見も多くあった。

⑥ ヤングケアラー支援には大人と子どもそれぞれに、ヤングケアラーの認知の拡大と、相談できる環境整備が必要

「ヤングケアラー」の概念は関係機関において認知度は高い（施設の回答 98.4%・個人の回答 95.8%・全体の回答 96.4%）が、今後は対象となる子どもの状況把握や、具体的な対応方法・支援制度などの「ヤングケアラー」に関わるより深い理解・知識が必要であり、子どもが相談しやすい環境だけではなく、関係機関の大人が支援について相談しやすい環境整備も必要とする意見が多くあった。

また、子ども自身や保護者は「ヤングケアラー」の認知や理解度がまだ低く、子どもが大人に相談することが出来ない、自らしない場合に、大人が「ヤングケアラー」の視点で子どもの状況を確認できていないことで気づけないこともある為、子ども自身がヤングケアラーについて知ることも必要であり、さらにヤングケアラーコーディネーターなどの専門職の配置が充実することも求められる。

【Appendix】

資料編
